昭和25年3月14日　第三種郵便物認可　令和3年11月1日発行（毎月1回1日発行）通巻867号

禅の友

—Zen no Tomo—

11
November 2021

ご本山だより

大本山永平寺【作務（さむ）】

十一月の永平寺は紅葉した色とりどりの木々に囲まれ、空気も少しずつ冷ややかになり、坐禅や作務の好時節です。

「作務」とは禅院において寺院内外の掃除や色々な作業等、一切の労働・作業の総称のことです。

永平寺でも坐禅とともに大切な修行として位置づけられ、年間を通して色々な作務（作業）があります。

道元禅師が中国宋時代の天童山（てんどうざん）でご修行の際、きのこ（海藻とも）を干している典座（てんぞ）老師に出会いました。強い日差しが照りつけ、庭の敷瓦は焼けつくような暑さです。老僧はしたたり落ちる汗をぬぐうこともなく、ひたすらに作業をしておられました。背中は曲がり、長い眉は真っ白で、道元禅師がお年を尋ねると「六十八」とお答えになられました。

道元禅師が「どうして、若い修行僧かお手伝いの人を使わないのですか？」と問うと、老僧は「他人にやってもらったら、私がやったことにならないではないですか」と答えました。

続けて道元禅師が「たしかにおっしゃるとおりですが、こんなに暑い日に、わざわざどうしてなさるのですか？」と尋ねると老僧は「いまやらなければ、いつやるというのですか」と、答えられ、道元禅師はこの時の出来事で修行の大切さを学んだといわれます。

紅葉季節の永平寺では落ち葉掃除の「掃き作務（はきさむ）」が毎日のようにございます。この「掃き作務」も誰かにやってもらったのでは、自分の修行にはなりません。

明日が必ずあるとは限らない命を頂いている以上、「また明日でもいいかな」と先送りにするのではなく、「今」修行することが大切なのです。

今日も永平寺の修行僧は『自分』で、『今』、大切な日々の修行を勤めております。

大本山永平寺
☎〇七七六・六三・三一〇二

ご本山だより
大本山總持寺

【山に逢っては山に棲み、水に逢っては水に棲む。臥するには臥し、起きるには起きる。『信心銘拈提』】

大本山總持寺
☎〇四五・五八一・六〇二一

瑩山紹瑾禅師

十一月二十一日は總持寺を開かれた瑩山禅師の降誕会です。つまり、文永元（一二六四）年、越前国・多禰村（現在の福井県越前市）の観音堂敷地でお生まれになった誕生日であります。この日は大祖堂で石附禅師御親修にてご誕生をお祝いする法要が営まれます。

瑩山禅師のお母さまはお腹の子が無事にこの世に生まれてくるよう念じ、毎日十一面観音像を礼拝し観音経を読まれたとされています。

そして、七五七年前の十一月二十一日にご誕生され、幼名を「行生」と名付けられました。

また、瑩山禅師はこのようなお母さまへ並々ならぬ孝順心を抱かれました。

瑩山禅師の降誕会は単にご誕生をお祝いするだけではなく、子を思う尊い親心への孝養を確認する法要なのです。

標題は瑩山禅師著であります『信心銘拈提』の一文です。山に逢ったら山を住みかとし、水に逢ったら水を住みかとし、寝るときは寝、起きるときは起きる。

禅では自身が置かれた状況、場所を素直に受け止め、積極的に自身の中でその生き方を問うことが大切なのです。

作家の吉川英治氏が「晴れた日は晴れを愛し　雨の日は雨を愛す　楽しみあるところに楽しみ　楽しみなきところに楽しむ」と言われたのも正しくそれなのであります。

曹洞 俳壇

選・坊城俊樹

胡瓜茄子馬牛の背に仏たち

静岡県　市村知久

評　これはまた滋味のあるすてきな句。季題は「瓜の馬」「茄子の牛」なのだが、それを「胡瓜や茄子の馬や牛たちに乗った仏」という言い方に替えてみた。それらの背に乗っているのがご先祖さまの姿。このような面白い表現の盂蘭盆の句にはじめて出会った。

銀河濃しジョバンニは今どのあたり

長野県　森山昌子

評　「ジョバンニ」とは宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」の主人公のことだろう。貧しい彼はやがて銀河へ向かう銀河鉄道に乗って壮大な旅に出かける。実際に銀河を見上げて彼のことを思う作者。この句もまた壮大で夢に満ちあふれた句となったのである。

◆巣に柔毛ゆれて帰燕の空となり　大阪府　柏原才子

◆百日紅百済観音壺を持つ　福岡県　進藤久乃

◆夕闇の路地に香るや夕化粧　神奈川県　堀田耕一

◆炎天下セーフかアウトか土煙　東京都　鈴木英治

◆端居して浄土の母の声を聞く　島根県　今岡式枝

◆へその緒の桐箱開ける敗戦日　兵庫県　内藤昭子

◆蟻踏まぬやうに一歩二歩三歩かな　神奈川県　佐野勇

◆先回りする掌に青蛙　三重県　西村廣視

◆五輪来て入道雲の力こぶ　山口県　藤野祥子

◆目の前の海の遠のく九月かな　鳥取県　眞山博充

選者吟

法師蝉の読経時雨となりしかな

俊樹

作句小見　法師蝉は秋の季題。その鳴き方はやはり秋になりつつある一抹の淋しさがある。それを「読経」が降るような「時雨」に喩えた。つまり「読経時雨」とは造語である。それ以外には何も言っていない。「上五」は字余りになっている。それもまた句の余韻。

曹洞 歌壇

選・長澤 ちづ

朱(あか)く咲くのうぜんかづらくきやかに夏空のあを切りとるやうに

熊本県　島田 佳可

評　凌霄花(のうぜんかずら)の花の色は、夏の強い日差しにも負けないくらい明るく鮮明で、空にくっきりと際立ち印象的。その花の形に夏の空を切りとって嵌(は)め込んだようと個性的に詠う。

仮設跡に花木植えいる児童らの声高々と秋風にのる

東京都　鈴木 正作

評　東日本大震災の被災者のための仮設住宅も取り壊され、その跡地に花を植える子どもたち。仮設住宅を去った人たちの平穏なその後の生活を祈るような花だ。秋空の澄み渡る高さと子どもたちの澄んだ声がよく響きあう。

◆若き日にためらい継ぎし農業を子が継ぎ孫は農機あやつる
岩手県　宍戸 さとる

◆紅茶ボロギクそのかみ兵の食(は)みしとう抜くたび心の疼(うず)く畑すみ
静岡県　杉原 民子

◆陽の沈む沖の彼方に伝説の秘話を伝える隠岐の島見ゆ
鳥取県　山本 浩一

◆少年の右手を離れ飛ぶ小石風切り水切り音立て跳ねる
鳥取県　眞山 博充

◆山清水何より待ちし病む妻に一年汲みに通いたりしも
福島県　西木 甚

◆一心に般若心経唱えれば亡妻出てきてぽんと肩打つ
福島県　佐藤 忠

◆道の辺の無縁仏の草を刈る盆も間近の畑帰りに
鳥取県　徳本 義則

◆胸の上に細くなりたる指組みてもう限界と旅立ちし友
宮城県　須藤 智恵子

◆今朝の母遠い眼をして何想う還りたいのは幼き頃か
福島県　髙橋 功二

◆桑の葉の若葉が茂る母の畠　養蚕やめて半世紀経つ
岩手県　千葉 喜惠

選者詠

調律は今年も無事に終えたれど弾く人いない無聊なピアノ

ちづ

作歌小見　農家の後継者不足が社会問題となるなか宍戸さん一家は順調に世代交代されていますが、作者自身が迷われた若き頃を吐露されていて考えさせられました。杉原さんの視点にも心打たれました。

ハガキ１通に３句（３首）以内を俳壇、歌壇別々に住所（都道府県名から）・氏名を楷書ではっきりと記入し送付先までお送りください。